

エルサレム神殿で、使徒ペトロとヨハネが40年来歩けなかった男を、ナザレの人イエス・キリストの名によって立って歩かせるという奇跡を起こした。これに基いて、民衆に向かってイエスの復活を宣べ伝えていたために、ペトロとヨハネはユダヤ教の最高法院に逮捕され、「何の力によって、だれの名によってああいうことをしたのか」と尋問された。それに対してペトロは、要するにあなたがたと神様とでは物事の評価はまるで反対であって、「あなたがたが十字架につけ」て殺したナザレの人イエス・キリストを、「神は死者の中から復活させ」、人を救い得る唯一の方とされたのである、とそう論じた。

この使徒たちの主張に対するその後のサンヘドリン(最高法院)の扱いと、またそれに対する使徒たちの答え、これが15節から22節に記されているところである。

15節から18節までは、サンヘドリン(最高法院)の協議、また出した結論である。

15-16節

「そこで、二人に議場を去るように命じてから、相談して、言った。『あの者たちをどうしたらよいだらう。彼らが行った目覚ましいしるしは、エルサレムに住むすべての人に知れ渡っており、それを否定することはできない。』」

「目覚ましい」と訳されている言葉(γνωστόν、グノーストン)(known)は、「よく知られている」とか「周知の」という意味の言葉。口語訳では「著しい」と訳されていた。

これに対し、「エルサレムに住むすべての人に知れ渡っており」と訳されている「知れ渡っている」というのは、「明るくなる」とか「公然となる」という意味の言葉(φανερών、パネロン)(is apparent)。

「それを否定することはできない」という「それを」という目的語は原文にはない。ただ「否定することはできない」となっているが、大事なものは主語である。「われわれは」「否定することができない」。つまり、サンヘドリン自身が「否定することができない」のである。

サンヘドリンは何を「否定することができない」と認めたのか。

一つは、この男が救われて「立っている」という、さっきの目の前に見せつけられた事実。その奇跡を「否定することができない」。

しかし、それだけではなくて、ペトロが先ほど、10節から12節までに語ったことを認めるかどうかは別としても、とにかくこの癒しの奇跡が「イエスの名によって」、あるいは「イエス」の一味によってもたらされたということは「否定することができない」。彼らが「イエスと一緒にいた者であることが分かった」というのだから。何しろこの40年間だれもユダヤ教の手では救えなかったこの病人が、確かに「イエス」の一味に

よって、「イエスの名によって」、奇跡的に癒されるということが起こった、このことは、われわれも「否定することはできない」とそう認めたわけである。

17 節「しかし、このことがこれ以上民衆の間に広まらないように、今後あの名によってだれにも話すなと脅しておこう。」

既に「知れ渡って」しまったのは仕方がないとして、「これ以上」「広まる」ことがないようにというのが、サンヘドリンの結論である。

サンヘドリンは、ペトロとヨハネの言ってきたことを論駁、反駁し、否定することもできたであろう。あるいは、「ひと言も言い返せなかった」（14 節）のだから、ペトロとヨハネの言う通り、なるほど人を救い得る名は「ナザレの人、イエス・キリストの名」だ、われわれは何も知らずに十字架につけたけど、確かにあなたがたの言う通り、神の御旨はナザレの人イエスと共にある、そこに旧約聖書以来の神様の御旨がある、と認めて、つまり悔い改めて、そこに立ち帰ることもできたはず。

しかし、彼らはそのどちらもすることなく、第三の道、「今後あの名によってだれにも話すな」と脅かし、つまり、キリスト教の布教の禁止、これ採ったのである。

18 節「そして、二人を呼び戻し、決してイエスの名によって話したり、教えたりしないようにと命令した。」

“病人をいやすようなことをしてはいけない”とは言わない。いやせるのならいやしてもいいが、少なくとも「イエスの名によって話したり、教えたりする」ことを禁ずる。

これに対する使徒たちの答弁が 19-20 節

「しかし、ペトロとヨハネは答えた。『神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。』」

「従う」「従わない」とい訳されている言葉（ἀκούειν、アクーエイン）は、いずれも「聞く」という言葉。恐らく「聞き従う」という意味で日本語は訳したのだと思われる。

「考えてください」と訳されている言葉（κρίνατε、クリナンテ）は、法廷用語として「判別する、告訴する、さばく、判定してください」という意味。口語訳や新改訳では「判断してもらいたい」と訳されている。

原文では、20 節には「なぜなら」という言葉あり、19 節から続いて、「神に聞く」ということの原因を「なぜなら」と言って語っている。

「話さないでいられない」という「いられない」と訳されているのは、「できない」という表現（οὐ δύναμεθα、ウ ドウナメタ）。「話さないでいるということはいけない」。口語訳も新改訳も「話さないわけにはいかない」と訳している。

イエスの名によってこれ以上語り続けることを禁ずるという布教禁止令に対して、ペトロとヨハネは、「神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、

判断してください」と答えた。

これは、「**神に聞く**」という時、「**あなたがた**」宗教の権威者が解説してくれるような神の声に聞くのか、そういう宗教界の権威者の声を経ないで私たちが直接神から聞くのか、という問題である。

「**なぜなら**」、「**わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないでいることはできない**」から、とペトロが言うように、神様から直接私たちが聞きとるということ、これをペトロとヨハネは「**見たことや聞いたこと**」と言い換えている。

ペトロとヨハネが「**見たこと**」とは何か。それは、主イエスのご受難と復活、昇天、そして神の右に坐しておられるイエス・キリストの名が足の不自由な男を救ったという、そういう数々の事実である。

また、彼らが「**聞いたこと**」とは、主イエスが体をもって地上におられた時にお教えになったこと、復活の主イエスが聖書を解き明かしてくださったこと、それらである。

だから、「**見たことや聞いたこと**」と聖書がいうとき、それは私たちの日常会話の中でのようなただの「見聞」というようなものではない。あくまでも、イエス・キリストからの特別な啓示によって見せていただいた復活顕現、昇天の事実、あるいはまた旧約聖書に基いて教えてくださった「**メシアの苦しみを受けて**」から「**栄光に入るべきだ**」ということ、旧約聖書の預言と契約に基づいて既にペトロも民衆に説教をした通り、旧約以来の神様の救いが今、主イエスの名によって現実のものにされているという教え、教理である。

だから、「**見たこと、聞いたこと**」とは、見た特別啓示の事実と、それについての聖書的な教理、この二つを組み合わせることを、ペトロたちは言っているのである。

使徒たちとしては、この特別啓示の事実と教理から成るキリスト教のメッセージを「**話さないでいることはできない**」。つまり、サンヘドリンの禁止にもかかわらず、キリスト教の宣教を続ける、という宣教継続を宣言したのである。「**話さないでいることはできない。**」

伝道者パウロも後にいう。「**もっとも、わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。**」(I コリ 9:16)

このように、福音宣教というのは「**話さないでいることができない**」「**そうせずにはいられない**」、そういう必然に促されて、どのような脅迫にもめげずに進められるのである。

イエス・キリストは、昇天の直前に弟子たちに言い残された。使徒言行録 1 章 8 節である。

「**あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。**」

これは、好き嫌いの問題ではない。あなたがたの上に聖霊が降り、力が降りると、否応なく、「あなたがたはわたしの証人となる」のである。だから、「話さないでいることはできない」のである。

21-22 節

「議員や他の者たちは、二人を更に脅してから釈放した。皆の者がこの出来事について神を賛美していたので、民衆を恐れて、どう処罰してよいか分からなかったからである。このしるしによっていやしていただいた人は、四十歳を過ぎていた。」

この訳では少し分かりにくいかも知れないが、「皆の者が……神を賛美していた」この「皆」というのは、後に出てくる「民衆」の「皆」という意味。「民衆の皆」が「神を賛美していたので」、それで「民衆を恐れて」処罰できない。

そもそもペトロが40歳を過ぎていた男をいやした時には、いやされた本人が、3章8節、9節で「躍り上がって」「神を賛美し」てついていく。それに対して、神殿境内の「民衆」たちは「驚いた」。そして「集まって来た」。これだけだった。ところが、ペトロの説教が済んでみると、「民衆の皆」の間に、本人と同じように「神を賛美する」とうことが広がっていた。サンヘドリンは、その「民衆を恐れて」判決を下せなかったのである。

これは、主イエスの最後の受難週で、やはり神殿の権威者たちが民衆を恐れて、主イエスを殺そうとしたけれども何も手を付けることが出来なかった（ルカ19:47-48）というのと全く同じである。それで結局「どう処罰してよいか分からず」、「二人を……釈放した」というのが結末。

使徒言行録は、この後、キリスト教とユダヤ教の関係が険悪になっていく有様を描いていくのであるが、キリスト教対ユダヤ教の関係の最後のところでではなくて、今ルカが使徒言行録4章で描いているこの段階では、正確にどういう関係になっているのか。要約していうと、21節にある通り、「**どう処罰してよいか分からなかったから**」「**二人を……釈放した**」、こういうのが今日のところの結論。

いよいよ険悪な関係に陥っていくキリスト教とユダヤ教の関係であるが、そのような関係においても、福音は、たゆむことなく語り続けられていく姿を、使徒言行録はこの後、見事に描き出していく。

私たちが福音を聞いて信じたのはこのおかげである。また、私たちそれぞれも、小さい者でありながら、その福音宣教の流れを更に推し進める者として働きたい。